

稚子ヶ淵

小川未明

青空文庫

もう春もいつしか過ぎて夏の初めとなつて、木々の青葉がそよそよと吹く風に揺れて、何とのう恍惚とする日である。人里を離れて独りで柴を刈っていると、二郎は体中汗ばんで来た。少し休もうと思つて、林から脱け出て四辺を見廻すとすぐ目の下に大きな池がある。二郎は何の気なしにその池の畔へ出た。

すると青々とした水の面がきらきらする日の光りに照つて一本の大きな合歡の木が池の上に垂れかかつていた。

「この池の名は何というだろう？」

二郎はその合歡の木蔭に来て鎌や、鉈を投り出して、芝生の上に横になつて何を考うるともなく熟と池の上を見下している。爽やかな風がそよそよと池を渡つて合歡の木の葉が揺れると寂然としている池の彼岸で鶺鴒が鳴いている。うす緑色の木の葉も見えれば、真蒼な常盤木の色も見えている……しかし人影は見えず静かな初夏の真昼である。

二郎は種々な空想を浮べていた……合歡の木の下に繁っている蔦蔦の裡で、虫が鳴いている。二郎は虫の音に暫時聞とれていたが、思わず立上つて蔦蔦の裡をそつと覗き込んで見たが、姿は見えなかった。またもとの芝生の上に横わつて池の方を見ていると又虫

の音が聞こえてくる……若し捕まえたら、彼の竹籠の中へ入れて、籠の中へ草を入れて、霧を吹いて、庭の南天の枝に掛けて置こう。そうするときつとこのように好い声を出して泣くだろう……。されど身動きもせずに、熟と眸を青葉の上に落して、滅入るような日の光りを見つめていた。

すると池の上で先刻がたの鶺鴒が一声啼いて向うの岸に飛んで行くのである。二郎は、その鶺鴒の下りた林の方に目を移して又考え込んでしまう。

「ああ、姉さんは死んでしまったのか。」

と、この時遽かに独言のように溜息を吐いて目から涙が溢れる。しかし誰れも見えていたのでないから、落つるままにしておくと、涙が頬を伝うてぼたぼたと膝の上に落ちた。

この時、何を思い立ったか、二郎は仰いで合歓の木を見上げたのである。

「大きな合歓の木だな、幾百年経つたろう……早く花が咲けば好いが、花が咲く時分になると村のお祭が何時でもあるんだ……しかし姉さんがいないから、寂しくてならん……盆になると姉さんは踊ったつけ……姉さんを村の者は美しいと言う。その噂を聞くと姉さんはいつも赤い顔をしたつけ……。ああ、つまらんつまらん姉さんは死んでしまったんだ。」

思い出すともなく、いつしか姉のことを思い出して二郎は泣いたり、又何か思うて笑ったりしているのである。

白いすき透るような雲が、ふわふわと高く飛んで池の上を渡ると影が水の上に映つて、赫々^{かつかく}と照つていた日の光りが少し蔭ると、天地が仄^{ほんの}りと暗くなつて、何処^{いずく}ともなく冷たい、香ばしい風が吹いて来る。何だか寂しいような、うら悲しいような氣持になつた。すると又不思議なことには、それはそれは……今迄聞いたことのない、美妙^{びみょう}の音楽の音が響いて来て、初めは何でも遠くの方に聞こえたと思うと漸々^{だんだん}近かく、しまいには何でも池の中から湧き出て来るように思われた。

而^そして時々姉の声も交つて、歌うている歌の音が聞こえて来るかと思うと、つい眠くなつて二郎は其処^{そこ}の芝生に倒れたまま、好い氣持でうとうとと眠つてしまつた。

さだめし二郎は面白い夢を見ていたのであろう。冷たい風が顔を嘗^なめるように身に浸みて、ふと目を醒まして見ると驚いた。

星の光りがちらちらと見え、全く日は暮れていたのである。池の面は黒ずんで、合歡に渡る風が一きわ高く、静かな山^{やま}中の夜は物凄^{ひつそり}い程に寂然^{ひつそり}としている。……耳を澄ますと虫の音が聞こえて来る。叢^{くさむら}の中でかさかさとするのは何かの小鳥が巢^{たえず}を探ねているので

あろう。手で地上を探つて鎌や、鉈を腰に挟んで、一步一步池の畔に出た時に心覚えのあ
るのだらば坂を登つて、やつと昼前に柴を刈つていた場所まで来て見たが、それから先き
は一向覚えがない。たとえ覚えはあつたにしても、夜のことと、とても小道を探し出す
ことは出来なかつた。

帰ろうと思つても、帰ることが出来ず、家では親達が心配しているだろうと思つと一刻
も茫然してはいられず、だんだん心細くなつて来て泣き出した。……ややしばらくして
泣き止んで切り捨ててあつた、青々とした柴の上に腰を下して、空の星をさびしげに眺め
ていた。

すると何処ともなく天外になつかしい声が聞えて、さわさわと木の葉が揺れるかと思
うと、日頃恋い慕つていた姉が、繁みの裡から出てきたのである。

「姉さん！」

と、余りの嬉しさに一声叫んで飛び付いた。……しかし死んだ人がどうして来たろうと思
うと空怖ろしいような、物凄いい氣持がしたけれど、見れば見る程まさしく自分の姉であり、
而して今自分の心細く思っている矢先であつたから、そんなことを考える間がなかつた。

「姉さん、姉さん！ 僕は嬉しかった。」

姉は物も言わんで、微笑^{ほほえ}んで、彼のうるんだ愛^{なさけ}の籠^{ひとみ}る眸^{ひとみ}で、二郎を打眺^{うちなが}めている。二郎は姉の袂^{たもと}にしかと縋^{すが}り付いたまま、もうもう決して決して、放さない^{はなさない}と決心したのである。

「さあ、二郎ちゃん行こう。妾^{わたし}が道を案内^{あげ}して上るから、いつかは、日常^{いつも}妾の帰りが遅いと迎いに来てお呉^{くれ}だったのね、今日は妾が途^{みち}を教^{おし}えて上げよう。」

二郎はその言葉を聞き、何となく悲しく感じて、姉に手を引^{ひか}れて林の裡から出た。……二郎は心のうちで、どうして姉が斯^{こん}様な山道^{くわ}を悉^{しつ}く知^していようか……斯^{こん}様なに暗いのにどうして斯^{こん}様なに路^{みち}が分^わるだろうかと訝^{いぶ}かしがりながら歩^あるいていた。しかし姉はいつになく、沈^{しず}んでいるように見えたので、自分も口を喊^{つぐ}んで成^{なる}たけ話をせまいものと黙^{もく}って歩^あるいていたのである……。やがて大きな沢^{たに}や、幾つかの溪^{たに}を越^こえて、細い細い山途^{やまぢ}に差しかかると、山の端^はを離^{はな}れて月の光^{ひかり}りが溪川^{せきせん}の水に宿^{やど}っている。二人は黙^{もく}ったまんまで途を歩^あいている……

この時姉は始めて弟^{おとと}を顧^{かへ}みて、さも名残惜^{なごしやく}そうにして見^みつめたのである。弟も月の光^{ひかり}りに始めて青白い姉の顔^{かお}をつくづく眺^{なが}めた。

「この道を真直^{まぢ}に行くと、直^ちきに彼^あの大きな原^{はら}に出る、すると向^{むか}うに家^{いへ}が見える。泣^なかん

で早くお帰り！　ちようど月も出たから……妾は此処で見送っていますよ。」

二郎の声はもう涙に咽んで、

「じゃ姉さんは、やつぱり帰らないの……。僕は姉さんと一しよに行きたいから連れて行って頂戴！　僕は独りで帰るのは厭だ。」

姉は流石に躊躇さすがためらつしていたように見えた。さも哀しげに溪間の月影を見下して、果ては二人してさめざめと泣くのである。小さき弟の胸には張り裂けんばかりに悲みの充ちて、さも心配らしい姉の顔を眺めている。

「そんなら、また明日彼の池の畔へ来ておくれ！　きっと妾が待っていますから、而して楽しく話をしましょうね。」

「じゃ姉さんは明日も、来てくれるなら僕はきつと彼の池の畔へ行つて待つていよう。」

「ああ、ほんとうに妾が待つてよ。」

「うんにや、僕の方が先に行つて待つているんだ。」

「ほほほ可笑しいことね。」

と、さびしげに姉は打笑うちえんだ。

「また明日にしてよ、今日はこれでお帰りよ。」

二郎は首肯^{うなずい}たまま、泣く泣く坂を下りて行つてしまふ。姉は爪先だてて見送っている。二人は幾度も幾度も見返えりつ、見送りつ、月の光にほんのりと姿は霞むが如く見えなくなるまでも……

しかし二郎の両親^{ふたおや}はいつになく我が子の遅く歸つたのに心配して、種々^{いろいろ}と二郎に仔細を問うた。始めのうちこそは何とも言わなかったけれど、問い詰められて隠しきれず、つい一部始終を物語つたのである。而してどうか姉を家へ連れて来たいと両親^{ねだる}に請願と両親は驚いて、顔の色を変えて、

「二郎や、それは魔物がお前を見込んでいるのだ。もうもう決してその池の畔^{はた}へ行くことはならんぞ。」

と、堅く言い聞かせた。

その翌日のこと、二郎はいつもの山へ出掛けはしたが、偶然^{ふと}昨日、両親から言われたことを思い出して、池の畔^{はた}りへは行かなかったのである。

やがてその日の昼頃となつて、もう大分仕事に疲れてきて、休もうかと思つていると、遠くで自分の名を呼ぶ声が聞こえる。二郎は握つていた青々とした小枝を地上^{ちびた}に落して、耳を傾けていると又呼ぶ声が聞こえるのである。確かに姉の声に相違^{ちがひ}がない。

二郎は空怖しくなつて、林の中に慄すくんでいると、その声は漸々と近づく。……突如として自分の前に立ち塞ふさがったものは、顔色の青晒あおやめている女の姿！　ぎよつとして見上げると頭髪かみのけは顔に乱れていて、物も言いわんで、自分を捕えたまま冷ひやかにけらけらと笑い、またさも嬉しそうに、我が顔を覗き込んだ。

「行こう行こう、二郎ちゃん！　妾さつきは先刻から大分待つていてよ。」
と無理にその場を押し立てて、何処いずくともなく連れ去つてしまった。

……二郎は何処どこへ行つたであらう、その晩はとうとう帰つて来なかつた。両親は非常に心配して、今日山へやらなければよかつたと後悔をしていると、日暮方から鳴出なりだした雷は益々ますますすさまじくなつて、一天墨を流したようで、篠突しのつく大雨、ぴかりぴかりと電が目いの眩くらむばかり障子に映うつつて、その毎たびに天地も覆くつがえるように雷が鳴り渡る、その夜は両親は心配に泣き明した。明くる朝を待つて池の畔へ行つて見ると、可哀そうに二郎の被つていた菅笠すがさが池の水に漂うていた。父親は其処そこに泣き倒れた。而して一先村ひとまずへ帰つて人々の助けを借りて、再び池の中を搜索したけれど、その苦心の効かいもなく、とうとう死骸を見付ることが出来なかつた。

其処で村の人達は相会あいかいして、これには何か不思議な仔細があるのであらうと議結ぎけつをし

て小祠^{やしろ}を大きな合歡^{かんぱつ}の木の下に建立^{こんりつ}して、どうかこの村に何事^{たたり}の祟^{たたり}もないように、どうか旱魃^{かんぱつ}の時にはこの村の田畑に水の枯れぬように、どうか小供の水難を救われるようにと祈祷^{きとう}をして、さてこの池をば稚子^{ちご}が淵^{ふち}の明神^{みょうじん}と名づけたのである。

毎年初夏の頃になると、薄^{うすくない}紅色の合歡の花が咲く。その頃になるとこの祠^{やしろ}の祭があるので、村祭同様に村中の者が家業を休む。その時にはこのさびしい山中にも太鼓の音がひびき、笛の音も冴える、而して春、夏、秋、冬、この池の水は青々として黒ずんで、静かな山や、林や、杜^{もり}の影を映している。青葉の夏も、紅葉の秋も、いつもなつかしい慕わしい眺めである。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「愁人」隆文館

1907（明治40）年6月25日発行

初出：「早稲田學報」

1906（明治39）年3月号

※「歩ゐいて」と「歩いて」の混在は、底本通りです。

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

稚子ヶ淵

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>